

3/24 戸塚伝道師・棕櫚の聖日：「あなたは救われています！」 ルカ 23：32～43

☆聖書箇所 ルカ 23：32～43

- 32 ほかにも二人の犯罪人が、イエスとともに死刑にされるために引かれて行った。
- 33 「どくろ」と呼ばれている場所に来ると、そこで彼らはイエスを十字架につけた。また犯罪人たちを、一人は右に、もう一人は左に十字架につけた。
- 34 そのとき、イエスはこう言われた。「父よ、彼らをお赦してください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです。」彼らはイエスの衣を分けるために、くじを引いた。
- 35 民衆は立って眺めていた。議員たちもあざ笑って言った。「あれは他人を救った。もし神のキリストで、選ばれた者なら、自分を救ったらよい。」
- 36 兵士たちも近くに来て、酸いぶどう酒を差し出し、
- 37 「おまえがユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ」と言ってイエスを嘲った。
- 38 「これはユダヤ人の王」と書いた札も、イエスの頭の上に掲げてあった。
- 39 十字架にかけられていた犯罪人の一人は、イエスをののしり、「おまえはキリストではないか。自分とおれたちを救え」と言った。
- 40 すると、もう一人が彼をたしなめて言った。「おまえは神を恐れないのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか。
- 41 おれたちは、自分のしたことの報いを受けているのだから当たり前だ。だがこの方は、悪いことを何もしていない。」
- 42 そして言った。「イエス様。あなたが御国に入られるときには、私を思い出してください。」
- 43 イエスは彼に言われた。「まことに、あなたに言います。あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます。」

☆説教 戸塚伝道師・棕櫚の聖日：「あなたは救われています！」

私が定住伝道師に任命されて、ご奉仕が許されてから、今年の春で7年になろうとしています。皆さまのお祈りにやさしく支えていただいた7年間であったことを、心から感謝いたします。

藤本満先生、圭子先生の代わりはできません。そんな力は私にはありません。

でも少しでも神さまのために、先生方のためにお役に立てれば、というその思いで、イエスさまに声をかけていただき、このような立場に召されましたことを、もう一度初心に帰って心から感謝したいと思います。

そこで、今日の説教は、ちょうど7年前、私が初めて定住伝道師として説教をする、その時の説教をもう一度語らせていただくように導かれております。

あ、またあの話か、と思われる方もいらっしゃるかも知れませんが、初めて聞く話かも知れませんが、

また7年前は母子室で楽しそうに遊んでいた子どもたちが、いま中高生となって座っておられるかも知れませんが、二番煎じではなくてリニューアルした（笑）つもりなんですけれども、ぜひみことばに心を留めていきたいと思います。

ルカの福音書 23 章 32 節～43 節をお読みいただきましたけれども、以前は「三つの十字架」という説教題で恵みを分かち合いましたが、今日は新たに、「あなたは救われています！」と題して、恵みを分かち合いたいと思います。

十字架——教会には欠かせない。私たちの信仰には到底、当然のように欠かせない十字架であります。

教会には必ず十字架が掲げられている（※と背中の壁の十字架を右腕で示す）。塔の上にも高津教会は十字架が立っている。

以前、高津駅のホームから十字架が見えました。

最近をよく目を凝らさないと、十字架が見えなくなってしまいましたけれども、「その十字架を見て教会に来た」という方が何名かおられました。

十字架——その十字架というのは、かつてのローマ帝国が、犯罪者を処刑するために用いていた方法の中で、最も残酷だった刑がこの十字架刑だったそうです。

この死刑道具、残酷な死刑道具がなんと救いのシンボル——意味が分かって十字架を付けておられる方々がおられます。

竹内先生もつけておられますけれども、でも意味が分からずに、ティファニーの十字架を（※両耳に手を当てて見せて）付けておられる方々もおられるかも知れません。

でもそれは、死刑道具だったということですが、そのような死刑道具が救いのシンボル。なぜ救いのシンボルか？

それは私たちの罪のために死んでくださった、その証しだからであります。

その十字架の死刑が、そのいのちを捨てる手段が、私たちの罪のためであったということでもあります。

私たちは罪人です。聖なる神さまのレベルには、どんなにあがいても、どんなに努力しても到達することはできません。

聖なる神さまの前に、私たち罪人は一瞬たりとも立つことができない。

もう滅んで一瞬の内に滅ぼされてしまうほど、神さまの「聖」というのは、もう言葉では言い表すことのできない程きよい「聖」であります。

でもそのような私たちも、《イエスさまの贖いの恵みの一事》のゆえに、十字架の上で《「完了した」とイエスさまが宣言されたその宣言》のゆえに、私たちはその聖なる神さまに向かって、「天の父なる神さま」「天のお父さん」「アバ父」とお呼びすることができるような関係となりました。

イエスさまの、《救い主イエスさまのしるし》——それが十字架。

それと共に、《それほどまでの憐れみを父なる神さまは》、御子イエスさまを通して私たち一人一人にかけてくださった《愛のしるし》——それが十字架であります。

イエスさまが十字架に架けられた金曜日、その金曜日の場面が、先程読んでいただきましたルカの福音書の 23 章の 32 節のところからず〜っと書かれていることでございます。恐らくみことばは活字ですから、さあ〜っと読んでしまいますけれども、これがもし映像となっていたら、どれぐらい恐ろしいことなのでしょう。か。

様々な十字架のシーンが映画化されていますけれども、でも恐らくどんな残酷な表現であったとしても、実際の十字架というのは、私たちが直視することのできないような、ものすごい残酷な、イエスさまにとっては恥ずかしい状態の十字架だったのだらうと思います。

そう考えますと、「ああ、受難週だ」「十字架だ」と口先で軽々しく言ってはいけない位に、私たちはイエスさまの十字架、それを思い巡らしても、思い巡らしても、思い巡らすことができないほどまで、リアルな残酷な状態にイエスさまは置かれていた、ということを忘れてはいけないなと思いました。

その十字架の金曜日、「どくろ」の丘に立てられた十字架は、先程お読みしたところから分かるように、一つだけではありませんでした。

三つの十字架が立てられていました。

ルカの福音書 23 章の 32 節からお読みいたします。

<ルカ 23 : 32~33>

32 ほかに二人の犯罪人が、イエスとともに死刑にされるために引かれて行った。

33 「どくろ」と呼ばれている場所に来ると、そこで彼らはイエスを十字架につけた。また犯罪人たちを、一人は右に、もう一人は左に十字架につけた。

イエスさまとともに、死刑にされる二人の犯罪人がいたということです。

1) じゃ、その三つの十字架のうちの、一つ目の十字架にかけられていた犯罪人を見ていきたいと思います。

39 節をご覧ください。

<ルカ 23 : 39>

39 十字架にかけられていた犯罪人の一人は、イエスをののしり、「おまえはキリストではないか。自分とおれたちを救え」と言った。

ここにイエスさまをののしった犯罪人が出て来ます。

「おまえはキリストではないか。・・・」

ここに書いてある言葉、丁寧に読んで行きたいと思いますが、

「おまえはキリストではないか」そのあとに、「自分とおれたちを救え」と言った、と書かれています。

「自分とおれたちを救え」——ここにまず「自分を救え」と隣の十字架に架けられているイエスさまに向かって言いました。

「自分を救え」——これは《キリストであることを証明しろ》という思いが、この言葉の裏に隠されているような気がいたします。

「おまえはキリストではないか。自分を救え。そしてもう一つ、おれたちを救え。」

《十字架の苦しみから解放されたい》という思いで言ったんでしょうね。

「おれたちを救え」——この犯罪人はなぜこう言ったのでしょうか？

なぜこのような言葉が出て来たのでしょうか？ なぜキリストという言葉を使ったのでしょうか？

恐らく、この前の 35 節の議員や兵士たちの、イエスさまの嘲りを聞いていたのかも知れません。35 節をお読みします。

<ルカ 23 : 35~37>

35 民衆は立って眺めていた。議員たちもあざ笑って言った。「あれは他人を救った。もし神のキリストで、選ばれた者なら、自分を救ったらよい。」

(※——この言葉を聞いていたのではないだろうか？と説明する戸塚伝道師)

36 兵士たちも近くに来て、酸いぶどう酒を差し出し、

37 「おまえがユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ」と言ってイエスを嘲った。

「他人を救った。自分を救え」(35) ——この言葉を耳にした。

その耳にした犯罪人が、同じような言葉を、隣のイエスさまに向かって、

「おまえはキリストではないか。自分とおれたちを救え」(39) と言ったのではないかと思われま

一つ目の十字架に架かっていたこの犯罪人、悔い改めることもなく、十字架の上でそのまま死んでいきました。

2) 二つ目の十字架に架けられた、もう一人の犯罪人をについて見て行きたいと思います。

<ルカ 23 章 40 節> (を読む)

40 すると、もう一人が彼をたしなめて言った。「おまえは神を恐れないのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか。

41 おれたちは、自分のしたことの報いを受けているのだから当たり前だ。・・・」

この 40 節をよく読みますと、「おまえは神を恐れないのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか」というこの言葉というのは、こういうことを言っているのではないかと思います。

それは、「そんな言い方をすると、おまえは神がどのような方か分からないのか。おれは神を信じようと思う」——こういう言葉が裏に隠されているのではないかと思います。

《おまえは神を恐れないのか？おれは神を信じようと思う。》

そして、「おれたちは、自分のしたことの報いを受けているのだから当たり前だ」(41) というその言葉の裏には、「おまえもおれと同じような極悪犯罪人で、十字架を受けるんだ。もうどうしようもないんだ」という思いでしょうね。

そしてさらに続きます。41 節の後半——「だがこの方は、悪いことを何もしていない。」

《この方》という言葉を使っています。

「この方」——もう一人の犯罪人は、真ん中の十字架に架けられている男が、「この方」と言わざるを得ないような存在だったということが、何となく分かって来た。

《この方——もしかしたらキリストなのではないだろうか》と分かり始めていたのだと思うんですね。

それは、この隣の十字架に架かっているイエスさまが、神さまに向かって「父よ」と祈る祈りを見ていて、そう感じたのかもしれない。

その「父よ」はどこに書かれているかというと、34 節です。

<ルカ 23 : 34>

34 そのとき、イエスはこう言われた。「父よ、彼らをお赦してください。・・・」

「父よ」——この「父よ」という言葉を、このもう一人の犯罪人は耳にした。

そして、この「父よ」と呼んでいる神さまに向かって——

《この男はただ者ではない。「父よ」と言っているということは、その天の神さまの子どもなのかも知れない。》

そして、《おれは神を信じようと思う》という気持ちになったのでしょう。

《おまえは神を恐れないのか。おれは神を信じようと思う。》

それがついに、イエスさまへの求めとなります。42 節——

<ルカ 23 : 42>

42 そして言った。「イエス様。あなたが御国に入られるときには、私を思い出してください。」

「私を思い出してください」(42) ——この「あなたが御国に入られるときには」っていう「御国」っていうのは、神の国ですね、神の王国です。

第三版の新改訳聖書には、「あなたの御国の位にお着きになるときには」と訳されています。神の国で、イエスさまが王として御座にお着きになるときには、私を思い出してください。共に十字架に架かり、隣に架かっていた犯罪人であるこの私を思い出してください、という、悔い改めの思いでこう言ったのでしょう。

すると、イエスさまは何と言われましたか？43 節——

<ルカ 23 : 43>

43 イエスは彼に言われた。「まことに、あなたに言います。あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます。」

イエスさまと共にパラダイスにいます。

「パラダイス」というのは、私たちが地上の生涯を終えた後にいる場所のことですね。

「天国」のことです。

でも、この聖書どこを探しても、「天国」という言葉そのものは新改訳聖書には出て来ない。

「天の御国」とか「神の国」っていう言葉はありますが、「天国」っていう言葉は聖書に出て来ない。

でも恐らく「天国」のことだと思うんです。「パラダイス」というのは。

「パラダイス」という言葉をイエスさまは使いました。

「あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます。」(43)

今週一週間、年度替わりで様々な忙しさが待っていると思います。そういう方々が大勢いるでしょう。

或いはいま試練のただ中で、苦しみ悩んでおられる方々も、もしかしたらおられるかもしれません。

病の中で、コロナの中で、この先どうなるんだろうかと思うような、様々な不安が心に襲っているような方々がいるかも知れません。

でも、イエスさまは仰います——「今日あなたは、わたしとともにパラダイスにいます。」

(43)

この言葉は犯罪人にかけている言葉のみならず、いま私たちの一人一人に掛けられている言葉でもあるかも知れません。

イエスさまと共にいれば、そこはどんな状況であったとしてもパラダイス。

それは天国に移される前、現在でも、このみことばは心に鳴り響くものがあります。

「今日あなたは、わたしとともにパラダイスにいる。」(ルカ 23 : 43)

イエスさまと共にいる。いる場所はパラダイスなんだ。

新年度、様々な事が待っている。でもこの時期、そして今年も来年も、毎日毎日、次の瞬間何が起るか分からない状況の中で、《イエスさまと共にいるならば、そこはパラダイス》なのです。

悩みはあります。問題課題は山ほどあるかも知れない。

職場や家庭の人間関係も大変ですし、自らの罪深さや弱さはどうにもならない時がある。

でも、そのような状況の中にあっても、イエスさまが共におられる所はパラダイス。

そう信じて生きていたいと思います。

私たちは「イエスさまが共におられる」ということを、頭で理解しがちなんです。

でもそうじゃない。ほんとにそうなんだと、腹の底から実感することがなんと私(戸塚伝道師)は少ないことでしょうか。

でも《イエスさまが共におられる場所はパラダイスなんだ》。

話を元に戻しますけれども、この犯罪人にイエスさまが「今日わたしと一緒に、パラダイス、天国にいますよ」——そのように、二つ目の十字架に架けられた、もう一人の犯罪人にイエスさまは語られました。

イエスさまと共に天国に移された、第一号がこの犯罪人だったのでしょうか？

3) 三つ目の十字架。イエスさまの十字架を仰ぎながら、終わりにしたいと思います。

よく私(戸塚伝道師)が説教で引用いたします日本基督教団の藤木正三(ふじき・しょうぞう)先生(※1927~2015)という牧師先生がおられます。

この藤木正三先生は次のような文章を書いていました。

「灰色の断層」というこの先生の書かれた本の中に、こういう一つの文章がありましたのでご紹介したいと思います。

題名は「恩寵」——恵みという意味ですね。

「恩寵」という題の文章です。藤木先生はこう書かれています。

(※読みはじめ)

イエスの十字架は、二人の犯罪人の十字架と共に立ちました。

その一人は悔い改めて、救いの言葉を死の間際に賜りました。もう一人は罪を告白せず、そのまま死にました。

これは悔い改める者は救われ、そうでない者は滅びることを示しているのでしょうか。

いいえ、十字架の傍では、悔い改めるも、悔い改めざるも同じであることを示しているのです。

悔い改めるか否で、人間の運命が決まるかのように言う「宗教のおどし」に注意しましょう。

人間の悔い改めなど知れているのです。十字架が私の傍に立っている——それですべてなのです。

(※ここまで)

こういう文章です。

この文章は、藤木先生の牧会されていた京都の教会の、週報の連載コラムとしてず〜っと載っていた、その文章の内の一つだそうです。

ある人がこの文章を読んで、「ほっとする〜、慰められる」と受け止められました。

しかし多くの方々から、「悔い改めを軽視している」とか、「福音を安っぽいものにしていく」とか、「悔い改めは宗教のおどしではない」と厳しく批判されたそうです。

実はこの文章を書く前に、藤木先生は考えていました。

十字架の両側の犯罪人の内、私は一体どちらの犯罪人なんだろうか？

悔い改めた方か、それとも悔い改めなかった方か？

考えている内に、藤木先生は「私は罪を告白しないまま死んだ、悪い方の犯罪人だ」と自分を見ることにしたそうです。

その時、《悔い改めの出来ていない自分の横にも、主の十字架が立っている、という事実気づいた》と言うのです。

藤木先生は思いました。《自分が為し得る悔い改めとは、この事実気づくこと》なのではないだろうか？

もし自分を悔い改めている良い方の犯罪人に属していると思っているならば、

その時はいつの間にか自分の悔い改めに自信を持っている時であったり、自分の悔い改めに安心している時であって、

つまり悔い改めが悔い改めでなくなっている時ではないだろうか？——藤木先生はそう思ったそうです。

この思い巡らしの結果が、この文章となったのです。

私（戸塚伝道師）は思いました。でもなぜ悔い改めていなかった犯罪人にも、主の十字架は立っていたんだろうか？ ほんとにそうだったんだろうか？

確かに主の十字架は隣りに立っていたことは確か。

でも悔い改めないまま、死んだではないだろうか。この人はパラダイスには行けてないんだろうか？

私は（戸塚伝道師）はず～っと考えていました。

でも一つ目の十字架の上の犯罪人のイエスさまのののしりの言葉を、よ～く読んでみますと、よ～く読んでみますと（※二回も繰り返して）、見えて来るものがあつたんです。

39 節——もう一度読んでみますね。

<ルカ 23 : 39>

39 十字架にかけられていた犯罪人の一人は、イエスをののしり、「おまえはキリストではないか。自分とおれたちを救え」と言った。

「おまえはキリストではないか」、「お前はキリストではないか」。

ののしっている犯罪人は、「おまえはキリストではないか」と言っているんですよ。

「あんた、キリストなんだろう！」ってことですよ。

これは、この犯罪人の心の叫びに聞こえて来ます。

「おまえはキリストなんだろう。だったら、そんな惨めな死に方なんかあるかよ～！」ってことでしょうね。

「そこで自分を救えよ、キリストならば。そして、おれたちを救ってくれよ。」

この「おれたち」って言葉を使っています。「おれを救ってくれよ」じゃないです。

「おれたちを救ってくれよ。」

恐らくこの状況を目の当たりにした、このルカの福音書を書いたルカは、当然この十字架の上の犯罪人の言っていることが「ののしり」に聞こえたから、こう書いているのかも知れません。

でも私たちはよく読みますと、「ののしり」というよりも、この男の「叫び」であり、そして、信仰告白に聞こえてくるんです。

「自分を救えよ。おれたちも救ってくれよ」——「おれたち」——つまりもう一人の犯罪人のことまで訴えていたわけです。

とりなしの祈りをしていたわけです、最初に。

「おれたちを救ってくれよ、隣の犯罪人と一緒におれたちを」と。

もう一人の犯罪人は、「私を思い出してください」って自分のことしかお祈りしていない。

でも、ののしった犯罪人は、「おれたちを救え、おれたちを救え」。

私はなるほどと思いました。

イエスさまと一緒にパラダイスに行った犯罪人は、イエスさまが救い主であることを分からせていただきました。

しかし、イエスさまをののしった犯罪人は、イエスさまが救い主であることを探し求めて、そして告白していた——「おまえはキリストではないか。おれたちを救え」。

どちらのためにも、救いのための十字架は立てられていた。

藤木先生が言われるように、十字架の傍では、悔い改めるも、悔い改めざるも同じであることを示している。

そして時空を超えた今の私たちのためにも、さらには私たちの家族や親族や、友人や知人や、日本の人、世界中の人々のためにも、イエスさまの十字架は立てられているということが分かります。

神さまに望まれて生を受けて、そして私たち全人類すべての人は、神さまにいのちをいただいて、生かされている。

神さまにとってかけがえのない一人一人、人間としての尊厳が与えられている一人一人。

この一人一人は、すべての人は、救われる可能性があるということです。

イエスさまの十字架は、すべての人のために立てられている。

恐らくもう一人の犯罪人、ののしった犯罪人も、私は永遠の滅びには行ってないと思う(笑)。

「おまえはキリストではないか」と告白し「おれたちを救え」と言って、お祈りしたこのののしった犯罪人も、イエスさまはパラダイスに連れて行ったと信じたいです。

私たちは「あの人は信仰告白したから、天国へ行ける。でもあの人はまだだから、永遠の滅びにあずかるかもしれない」——私たちが勝手に判断しがち。

でもだ～れも断言することはできない。

神さましかご存知でないことなのです。

私(戸塚伝道師)が7年間、ず～っと言い続けて来た福音理解の根底。

それはAにもかかわらずBという恵みです。AにもかかわらずB。

だれが救われるか——それは私たちが決めることではない、と言い続けて来ました。

その裏を返すならば、十字架の贖いという恵みの視点に立つ時、誤解を恐れず申し上げるならば、《もうすべての人は救われているんです》と声を大にして言いたいです。

この神さまの可能性に、漏れる人は一人もいない。

罪の代価は、2000年前に、この十字架ですべて支払われている。

あなたの罪も、あなたの罪も、全部もう赦されることになっているんですよ～。

あなたは救われているんですよ～。

(※右手のこぶしを振って) もう声を大にして言いたいです。

あのペテロも書いていますね。

「神はすべての人が救われて、悔い改めに進むことを望んでおられる」とペテロ第二の手紙の3章の9節に書いています。

神さまが私たちの生みの親ならば、当然滅びることなんか望んでいないでしょう。

「あなたは救われているんですよ～」と、私たちはすべての人に言いたい。

どんなことを言われようと、私たちは言いたい。だから福音なんですよ。

プレゼントは用意されている。あとはその包みを開けるだけ。

まだ信じてもない。悔い改めてもいなかった。そんな私の横に、私のための十字架は既に立っていた。

そのことに気づくか、気づかないかです。

それは聖霊の働きなのか、この間お話しした先行的な、前もっての恵みなのか、イエスさまから与えられる信仰のゆえなのか？

それは私たちが頑張るということではない。分からない、それは。神さまが導いてくださることなんですよ。

でも私たちは、「あなたは救われているんですよ」というそういう思いで、すべての人と関わりたい。

「ああ、この人のためにもイエスさまは十字架に架かってくださっているんだ」

「あっ、この人のためにも、イエスさまは十字架に架かってくださっているんだ」

「まだ信じてはいないけれども、すべての人がすべての人が、イエスさまの救いにあずかる可能性があるんだ」

そのことに気づいた「あの日あの時」、自分が救われていることに目覚めた「あの日あの時」、
「あの日あの時」と言えない位に、当たり前の中で生活しておられる方々もおられるかも知れませんが、私たちはこの救い主に会いました。

今日初めて教会の礼拝にいらした方、(※カメラ目線で) 良くお出でくださいました。

あなたのためにも、イエスさまは十字架に架かりました。

そして、あなたももう救われているんです。

理解できないかも知れませんが、今は。

勝手に私が言っていると、そういう風を感じておられるかも知れませんが、あなたは救われています。

《あなたにもそれを気づいてほしい》という祈りを私たちは続けていきたいと思えます。

この「あなたにもこのことに気づいてほしい。そのために、わたしはあなたのために十字

架につき復活した。あなたはもう救われる可能性がある」という、この熱い熱い（イエスさまの望みのゆえに）、「ひとり子を十字架につけるほどまでに、私たちを愛して下さった神さま」（ヨハネ 3：16）の熱い熱い思いのゆえに、そして誰かの愛のこもった祈りのゆえに、私たちはイエスさまに導かれ、今ここにいます。

☆お祈りいたします——戸塚伝道師

イエスさま、感謝いたします。あなたの十字架は、あなたをののしった犯罪人のためにも立っていた。そしてその十字架が、こんな私の傍にも立っていた。そのようなあなたの愛のみわざを、すばらしい福音・良い知らせを知らずにいた私たちです。

にもかかわらず、あの日あの時、私の罪のためのあなたの十字架に気づかせてくださり、救い主であるあなたと出会わせていただきました。心から感謝いたします。「もうあなたは救われているんです。これがその神さまからのプレゼントです。どうぞ包みを開けてください」と語り続けたいです。

受難週を迎えました。救い主であられるあなたご自身を飢え渴いて求めている多くの方々が、自分の傍に立つ十字架に気づくことができますように、聖霊が恵みをもって働きお導きください。愛する救い主イエスさまのお名前によってお祈りいたします。アーメン。